

学内六報

2020.2.25

no.1531



5大学や企業の連携による共創施設
「渋谷キューズ」って何ですか？

昨年の近藤選手に続いて箱根駅伝に出場！
阿部選手に聞いてみた

可能性の種を生み出す、5大学や企業の共創施設

シブヤ

キューズ

SHIBUYA QWS ……って何ですか?



ENTRANCE

1



CROSS PARK

2



CAFE HINT

3



SHARE KITCHEN

4



PROJECT BASE

5



SCRAMBLE HALL

6

渋谷キューズの活用法を検討するWGの座長に聞きました



「SHIBUYA QWS(渋谷キューズ)に係るWG」座長
総合文化研究科教授

真船文隆

渋谷駅周辺の再開発に東大も協力しようという話は、以前から野城智也先生(生産技術研究所)を中心に検討されてきました。渋谷スクランブルスクエアの1フロアを社会連携活動に使う構想は計画段階からすであつたそうです。QWSの方向性を決める協議会で5大学連携の枠組みが決まり、東大がこの場をどう使うかを議論する場としてWGが発足。私や副座長の玄田有史先生(社会科学研究所)をはじめとする9名で2019年6月から活動を始めました。

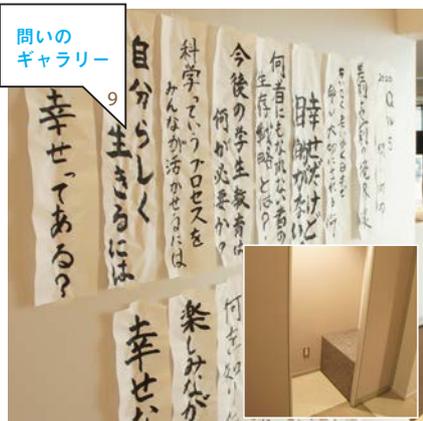
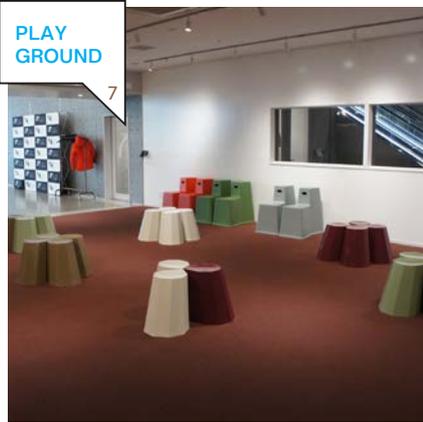
まず考えたのは、11月の開業記念イベントのこけら落としに何をやるか。社会との接点となる重要な場なので、せっかくなら多くの人が集まるインパクトのあるものを、と考える中で浮上したのが総長と隈研吾先生(工学系研究科)の対談です。隈先

生は渋谷スクランブルスクエアだけでなく再開発全体のプランに関わってきましたし、社会を駆動する大学としてこの場をどう捉えるかを話すならやはり五神総長しかいない、という結論になりました。

5大学が優先して使える場

QWSは大学をはじめとする様々な領域のパートナーが連携して価値創造を進める場で、5大学だけが使うわけではありません。QWSと大学の連携プログラム「QWSアカデミア」は原則毎水曜日に開催しており、50名程度収容可能なクロスパークや20名程度収容可能なプレイグラウンドを使用できます。約200名を収容するスクランブルホールは、1大学あたり年度内2回程度会場費無料で使用できます。

再開発で大きく変貌する渋谷駅周辺で、ひととき存在感を放つ渋谷スクランブルスクエア。その15階に昨年11月にオープンした渋谷キューズは、東大・東工大・慶大・早大・都市大の都内5大学や企業をはじめとした会員が、未来に向けた新しい価値創造をともに進めていくための活動拠点です。Question with sensibility(問いの感性)の頭文字をつなげた名を冠する注目の施設について紹介します。



渋谷スクランブルスクエアのオフィスイントランスのエレベーターで15階へ。1.大きなりビングのようなクロスパークは様々な人々が行き交う空間。顔ぶれを見てスタッフが出会いを演出することも。レイアウト変更で約50名収容のイベント空間にも。2.カフェでは、ドリンクや軽食を注文するほか、QWSゆかりの本が並ぶ書棚を閲覧する楽しみも。3.バルミューダ等の家電を備えるキッチン、何かつまみながらの井戸端会議の場やプロトタイプの展示スペースにもなります。4.プロジェクトベースは新しい価値創造に取り組む空間。可動式テーブルやホワイトボードのほか、レーザーカッターや3Dプリンターも使えます。テーブルには自分のプロジェクトを書いて置くのがルール。興味を持って話しかけることで新たな展開が生まれます。5.ホールは3面のスクリーンや音響・照明設備、控室を完備。ケータリングを利用したパーティーもお勧め。6.プレイグラウンドの壁と床はソフト。子どもが遊べるだけでなく、ヨガや軽い運動もOK。アイデアに詰まった際の気分転換によさげ。7.一番奥に位置するのは落ち着いたサロン。眺望のよいレストランとしての利用はもちろん、4つの個室を使ってクロズドな商談を進めるのにも好適です。8.プログラムの一環で生まれた問いを掲げるギャラリーには、己と向き合うためのシェルタースペースも！9.スキルやリソースの交換を促す場、問いに答える付箋を貼る場など、応答の機会が多いのもQWSの特徴です。

これらの無料枠以外に、有料でスペースを使うこともできます。たとえばスクランブルホールの施設利用の基本料金は半日23万円(税別)ですが、5大学には割引料金が適用されます。12月に私が教養教育高度化機構「ブランドデザインスタジオ」の「SDGs×TOKYOでブランドを創る」イベントで使ったのはこの仕組みでした。使ってみて実感したのは、ここでやると学生のテンションが上がること。いつもは構内のホールや教室ですが、たとえば21KOMCEEだと学生にはもう慣れがあります。でもここなら、渋谷だし、新しいし、景色がきれいでインスタ映えもする。街のエネルギーにインスパイアされることもあるでしょうし、駒場に比べると学外の人も格段に来やすい立地は大きな魅力です。14階以下にはレストランなどの商業施設があり、15階でイベントに参加した後に

一杯、という楽しみもありますね。
企画がある学生に好機到来
 WGでは今後のキューズの活用法を考えていますが、特に5大学の割当てを有効に使いたいと思っています。社会への発信拠点として申し分ない空間が使えるわけです。スクランブルホールもクロスパークも今後の企画はこれから。渋谷から何か発信したい教職員はぜひ手を挙げてください。学生に伝えたいのは年に4回の「QWSチャレンジ」です。未知の価値に挑戦するプロジェクトを提案し、採択されると、計画実現のためにプロジェクトベースが無料で3ヶ月使えます。渋谷駅直結でスクランブル交差点を見下ろすこの一等地が、です。歩いても15~20分の距離にいる駒場生には特にお勧め。東大から渋谷経由で世界へ問いかける可能性の交差点を活用してください。



12月22日には生産技術研究所が「第5回価値創造デザインフォーラム デザイン駆動工学 Design-Led Engineering」をスクランブルホールで開催。1月22日には梶田隆章先生が「ニュートリノ振動の発見」と題してスクランブルホールで講演。1月29日には野城智也先生が「すまうIoTを如何に実現するか? -来たれベンチャーの騎士たち」と題したイベントをクロスパークで実施。すでに可能性の種は続々生み出されています。
 ●問い合わせ 社会連携推進課
 shakairenkeika.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp 080-7544-1424

前回の近藤選手に続いて箱根路を疾走!

阿部選手に聞いてみた



陸上運動部(教育学部4年)

阿部飛雄馬さん



10区を力走する阿部選手。右腕のGARMINの時計は近藤先輩から譲り受けたもの。

レース中につけていたCHRIOの腹圧ベルト。「腹痛を防ぐ効果があるんです」。



出走できない可能性も…

——箱根を走ってどうでしたか。

テレビで観るのとは大違いでした。あんなに多くの人でできた壁の中を進むとは……。歓声で地鳴りしている感じで耳が痛くなりそうでした。走る前もレース中も実感がなくふわふわして夢の中のような感じでした。

——レース前の目標は?

区間10位、72分でした。予選会のペースなら十分に可能と思いましたが(結果は75分26秒)、ピーキングに失敗したのか……。

——どの辺りから不調を認識しましたか?

最初の1kmを想定通り3分1秒で通過した時点で、最後までもつかどうかギリギリだと思いました。5km辺りから、このままでは残り18kmもたないと思ってタイムを落として。それでも苦しくて焦って、予選会なら勝てた相手にどんどん抜かれ、精神的にもきつく……。14位でタスキを受けて7人に抜かれました。23kmは自分史上最長で、経験不足も影響したと思います。

——出場しない可能性もあったとか?

10区の候補だった流経大の選手が直前に調子を上げて。学連チームは例年11月末に記録会を行ってタイム順に10人を決めていました。でも、皆で話し合い、直前まで走りを見て監督に決めてほしいと要望を出したんです。結局、自分が10区、流経の選手は6区。それが監督の判断でした。

——10区というのは希望通りでしたか。

思い入れがあったのは松本翔さんが前に走った8区でした。憧れの存在だった人の記録をここで越えたいと思ったので。

——近藤さんから何かアドバイスは?

特に話は聞きませんでした。特別な人なので、話を参考にするのは難しいと思ったし、肌感覚を大事にしたかったんです。ただ、先輩を見て箱根出場が決して不可能なものではないと実感していました。同じ環境で練習した人が出られるなら自分だって、

と思えた要因はやはり近藤さんです。

——ちなみに昔から有望選手でしたか?

中高では県大会で優勝しました。東大では1年の頃から近藤さんに次ぐ位置にいたと思います。高校時代の持ちタイムも部内では上位でちやほやされた頃もありました。

——さて、教育学部での卒論の題名は?

「ライトノベルに見る「共感」の構造と教育学的意義」です。ライトノベルは軽いイメージで捉えられていて、国語の教科書に載ることはありません。でも、共感という意味で捉えると教育的な意味があるんじゃないか、と問いかける感じで書きました。指導教員は教育哲学の山名淳先生です。

——アニメも好きなんですよ。

大好きなのは「ヴァイオレット・エヴァーガーデン」。絵がきれいです。泣けます。

授業で出会った哲学で復活

——哲学が好きだとも聞きましたが。

自分で考えるのは好きです。実は駒場時代は苦悩の連続でした。度重なるケガでトータル1年ほど走れなかったんです。高2の頃に出した自己ベストも更新できず、箱根なんか無理だし、結果を出せないなら価値はない。走って結果を出して認められることで成立していたアイデンティティが崩れました。

——それを救ったのがアニメ?

哲学です。道徳哲学の片山勝茂先生の授業で聞いた哲学の話がおもしろくて、自分は哲学が好きな人間だ、と語るのはいいな



レースで履いたのは話題のNIKEの厚底シューズ。「予選会時はピンクのモデルでしたがへたつたので12月半ばに奮発して買いました。勝手に前に進むし疲れにくいし楽しい。もう手放せません」。

1月2日、東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）第96回大会に、陸上運動部の阿部選手が出場しました。記憶に新しい第95回大会の近藤選手に続き、2年連続で東大のランナーが箱根路を駆け抜けたのです。「箱根駅伝に出るなら強豪校ではなく東大から」と心に決めて練習に打ち込み、度重なるケガによるアイデンティティ崩壊の危機を克服して想いを達成した本人に話を聞いてみました。

と思いました。面倒な問題を吟味して心に響くことをいう感じが面白く、これなら陸上でダメなときでも、哲学を考えるからいいやと思えるぞ、と。自分の軸が陸上と哲学の2本になり、心に余裕ができたんです。3年になってケガが癒え、まともに練習できるようになりました。それまで練習で120%出すことがケガを呼んでいました。でも哲学と出会って、いい意味で適当さが生じて、かえって陸上の力も上がりました。

——大学院では何を研究しますか。

デス・エデュケーションです。癌の末期患者にどう死と向き合わせるか、いい死に方をするために教育ができることは何なのか、死とは何かを子どもに考えさせるにはどうするか、など。まだテーマを絞れていませんが、その辺りに興味があります。

——今後の展望を教えてください。

3月にびわ湖毎日マラソンに出ます。大学院にいるうちは全日本インカレに出るのが目標。将来マラソンで結果を出すための礎としてトラックでスピードをつけます。1万mの持ちタイムを標準記録まであと1分縮めないといけません、大丈夫です。

——最後に「サザエさん」について一言！

小学生の頃に大好きで、録画して一日3-4回見ていました。定期券がほしいとイクラが黙々をこねる回とか丸暗記しました。自由研究もサザエさんで出して学年代表に選ばれて過熱したり。昔はサザエさん好きが自分のアイデンティティだったんですね。

ゆかりのお2人にも聞いてみた

陸上部部長として阿部選手を見守ってきた八田秀雄先生

(総合文化研究科)

飛雄馬君、お疲れ様でした。走る前に鶴見中継所で握手した時、また大手町の大観衆と大歓声の中を走り抜けた時、本当に感激しました。総長にも大変喜んでいただきました。学生連合チームの主将としてもいろいろ発信しチームをまとめ、よくやったと思います。

振り返れば3年生までは急に貧血になったりで、今ひとつともいえる状況でした。それが最終学年、特に予選会での走りが素晴らしいものでした。自分のペースを身体に覚えさせ、そのペースを徹底し、自己ベストを1分以上更新しました。彼らしいよく考えた走りでした。運動生理学関連の授業にもよく出た研究熱心さのおかげでもあるでしょう。また箱根に出られたのは、前回ようやく出走できた近藤君の作ってくれた道があり、その背中を追ったからということもあるのではないかと思います。

ともかく2年続けて陸上部から箱根を走る部員が出ました。当然この後にさらに続く部員が出てくれることを期待します。東大は大学院でもチームとして予選会を走ることができずから、飛雄馬君は次回以降も予選会を走れます。後輩にその小さいが大きい背中をこれからも見せつけてやって欲しいと思います。



大手町のゴール付近では応援部が熱い声援を送りました。隣の順大さんもついちら見。

先に箱根駅伝を走って後輩を刺激した近藤秀一さん

(総合文化研究科修士課程/GMOアスリーツ)

昨年私が箱根駅伝を走ろうが走らまいが、彼は箱根路へとこぎつけていたでしょう。控えめに言っても絶対に優を出さない大鬼教授のように頑固で、自分が決めた道だけを突き進むやつなので、私のことをライバルだとか目標だとか意識したこともないと思います。そういう意味では、箱根駅伝を経験した者としても特別に贈る言葉はないかもしれません。『僕は箱根を走るために東大に入ったんです』。ある新聞記事の見出しにあるように、傍から見たら馬鹿らしい夢に向かってひたむきに努力を続けた結果、ようやく最後に報われた。それがたまたま2年連続で起こったというだけです。自分の力で夢を叶えた彼に心から拍手を送りたいです。

彼の10区は京急蒲田と内幸町の二か所です。応援しました。どんな記録で走るかは正直どうでもよく、ここまで頑張ってきた自分へのご褒美として心置きなく走ってほしい、ということだけ考えていました。雑踏のなか中継に映し出されたゴールシーンは、ちょうど1年前に自分がスタート地点から見た景色と同じものでした。大手町から鶴見まで運んだ襪を、1年越しに大手町まで届けてくれたのか。そう思うと胸が熱くなりました。

レース後日、彼のTwitterにて。



おっとそうきたか。当分はやめられそうにないですね。

つないだタスキの裏には、選手、監督、コーチ、マネージャーの20人の直筆署名が。「主将として自分がもらいました。洗濯はしないでとっておきます」。



チームとして出場した唯一の箱根駅伝

1979～1982年の予選会では4年連続で8位（6位までが本戦に出場）となり、箱根駅伝出場まであと一步のところまで近づいていた東大チーム。記念大会ということで11位まで枠が拡大された第60回大会に向けて、激しい雨の降る1983年11月6日、大井埠頭周回コースでの予選会に臨んだ東大チームは、7位に入って悲願の出場権を獲得しました（写真は2008年3月の「学内広報」1371号より）。「年に3～4回ある懇親の場などで、当時を知る先輩方からこのときの話はうかがっています。陸上運動部の誇りとして私たちも語り継いでいきたいと思います」（阿部）。



海と希望の学校 in 三陸

第6回

岩手県大槌町にある大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターを舞台に、大気海洋研究所と社会科学研究所がタッグを組む地域連携プロジェクトがスタートしました。海をベースに三陸各地の地域アイデンティティを再構築し、地域に希望を育む人材を育成するという文理融合型の試みです。本学の皆様が羨むような取り組みの様子をお伝えします。

盛岡でサケの連続講座を行いました

吉村健司  大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター 特任研究員

第2回目の関連資料

三陸沿岸地域で展開してきた「海と希望の学校 in 三陸」。2019年度からは盛岡でも、その活動を展開しています。盛岡の有志の方々が中心となり、「海と希望の学校 in 三陸 盛岡分校」を立ち上げ、活動してきました。2019年11月から2020年3月までの月1回、岩手県立図書館にて盛岡市民の方々を対象にサケをテーマにした連続講座「鮭から見えるいわての海～食べるだけじゃもったいない！～」を開催しています。



第1回目（2019年11月9日）には、北川准教授（沿岸海洋社会学分野）が「岩手に帰るサケの生態」と題して、盛岡市内を流れる北上川や中津川に遡上するサケの生態について講演を行いました。講演では、北上川と三陸沿岸の河川を遡上するサケの生態的な差異のほか、中津川の橋の下で見られるサケは産卵前の休憩であることをお話しました。特に後者については参加者も驚かれ、中津川のサケについて「見方が変わった」、「これから温かく見守りたい」などの感想が寄せられました。

第2回目（12月7日）と第3回目（2020年1月18日）は、私が担当し、「三陸沿岸地域で獲られたサケの行方」、「又兵衛祭りをめぐる民俗」というテーマのもと、岩手におけるサケをめぐる歴史や民俗、文化について講演しました。第2回目の講座では、江戸時代から明治時代におけるサケをめぐる制度や流通について、歴



史資料などを用い、また、第3回目では、岩手県宮古市津軽石で行われているサケの儀礼「又兵衛祭」を例に、サケをめぐる儀礼や伝承などについて講演しました。サケは現在、我々にとって非常に馴染み深い食料といえます。しかし、歴史的にはサケは庶民が減多に食べることでできない高級魚だったり、様々な伝承や伝説を持つ魚だったり、日常ではあまり意識することのない、人とサケの関係について実感を持っていただくことができました。参加者からは、「人間の生活に関わり深く、身近なサケがこんなにも奥深いものがあり、知らないナゾだらけの事柄でした」という感想もいただきました。また、これらの講演では、岩手県立図書館所蔵の関連書籍を挙げたところ、早速、借りてお帰りになった参加者もいらっしゃいました。講座を通して、サケ

に対して興味を持っていただけたのではないかと思います。



中津川に遡上するサケについては、秋になるとテレビなどで報道される風物詩であり、市民の関心は高いものです。参加者は盛岡市民のみならず近隣の市町村、さらには沿岸の宮古市や山田町からも参加していただき、サケに対する関心の高さを肌で感じることができました。我々は普段、沿岸地域で研究活動を行っており、盛岡をはじめとした内陸の方々と交流を持つ機会は多くはありません。しかし、一連の講座を通じて、盛岡の方々にも改めて岩手県の県魚であるサケに対する関心を寄せていただいたことは、我々にとっても新たな研究のモチベーションに繋がりました。

参加者に紹介したサケ関連資料（一部）



第1回目の講座の様子



第3回目の講座の様子



「海と希望の学校 in 三陸」動画を続々公開→ YouTube サイトで [海と希望](#) と検索！

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）



部局長だより 第6回

～UTokyo 3.0 を導くリーダーたちの横顔～



新領域創成科学研究科・数理科学研究科編

地域や人や犬にも広がる「学融合」

「学融合」の理念の下、産や学との連携のほか、地域と連携した研究も進めてきました。たとえばU D C K^{柏の葉アーバンデザインセンター}では、本研究科の教員が中心となって柏の葉キャンパス駅周辺の開発に関わり、柏の葉エリアのあるべき姿を13年にもわたって探っています。構想は全国に広がり、昨年11



新領域創成科学研究科長
大崎博之 趣味:自転車

月には福島県新地町にUDCしんちが発足。学生が現地で行なうなど、教育と研究の両面で活発に活動しています。

その他の特徴的な活動としては、研究科が擁する国内有数の次世代シークエンサーを活用した生命データサイエンス人材育成教育プログラム、MITとの連携による社会人教育プログラム、学生の提案を募集して実施する学生創成プロジェクト支援プログラムなどがあります。新しい試みとしては、盲導犬歩行学分野の社会連携講座を7月に始めました。日本盲導犬協会と一昨年行ったシンポジウムを契機に、ゲノム解析の学術活動と視覚障害者の支援活動を融合するもの。たとえば、ゲノム解析で適性を調べ、盲導犬に向けた犬を選んで訓練すれば、人にも犬にも有益です。公益財団法人との連携講座はおそらく初。学術のシーズを社会貢献に繋げる一例と捉えています。課題は多様な研究・教育活動の成果に発信が追いつかないこと。広報体制を拡充していきたいと思えます。

数学と社会を架橋する人材育成を

数学は抽象的ですが、それは普遍性があるということ。多分野で使える枠組みを提供できる学問でもあります。先端的な数学を社会に浸透させ、生命科学も含めた諸科学に越境することを目指しています。

教育面では昨年10月から卓越大学院「変革を駆動する先端物理・数学プログラム」

(FoPM)を始めました。数学のコアを身につけた学生がグループワークを通して産業界の課題に挑む「産学パートナー教育プログラム」がベース。ダンス映像の自動採点アプリ、カーレースのタイム短縮の研究など、成果を挙げている事例も多く生じています。数理と社会を橋渡しする人材の育成を推進することはアカデミアにも社会にも有効だと思います。

次代を担う才能の開拓として、玉原セミナーハウスの高校生キャンプでは、折紙、タイル張り、円と球の幾何学といった課題に取り組んでもらっています。「数理女子」のシリーズでは、数学の魅力を伝えるイベントや、小中学生の娘と母が対象のワークショップも続けています。親の不安を除くには社会的にニーズの高い分野だと伝えるのが重要。数学の導入でOCRの精度を上げた当研究科発のベンチャーArithmerなどはよいモデルです。女性教員が4年前から倍増した一方、学生の方はまだ結果が出ていません。今後の重要課題です。



数理科学研究科長
河野俊丈 趣味:クラリネット

UTokyo バリアフリー最前線!

第18回



熊谷晋一郎室長が取材原稿で伝える障害研究の現場⑤



ダイバーシティを実現する社会モデルの考え方

幼少期から視覚に障害のある星加氏は、高校まで統合教育を受けてきたが、教育委員会から毎年「来年度は盲学校へ」と説得されるなど差別的な扱いも経験してきた。やがてそうした社会の成り立ちに興味を持ち始めたが、高校までは社会は法と金で動いてい

教育学研究科
星加良司 准教授の巻



るのだろうと想像していたという。大学入学後、直接的な人間関係を深く取り持つ中で、法と金以外の機微で社会が動いている側面に気づかされる。卒論で社会学の面白さに気づき大学院への進学を決めたが、当時は、障害者として扱われてきたことへの反発もあり、障害を研究対象にするつもりはなかった。

だが深く学ぶにつれ社会学における障害問題の重要性に気づいていった。星加氏によれば社会学は、フランス革命以降、封建制や宗教が力を失い、新たな秩序を模索する中で生まれた学問だ。近代的秩序の原理として、能力を基準に財と機会を配分する能力主義が重視され、裏面で、能力の低さとして規定される障害問題が生み出された。星加氏には、障害問題を通して社会全体が見えてくるという直観があった。

星加氏が専門とする障害学には「社会モデル」という考え方がある。個人の特質には差があるが、すべての差異が等価値に扱われるわけではない。有利に扱われる特質を持ち、差異の扱い方自体を決められるマジョリティと、不利に扱われる特質を割り当てられるマイノリティとの間に非対称性が生まれる。社会モデルとは、マジョリティ-マイノリティ関係として障害問題を捉える視角である。現在、社会モデルを人々に定着させる教育プログラムを開発している星加氏は、社会モデルにはマジョリティの特権を掘り崩す面があるため、マジョリティ側の反発を抑えつつ本質を伝えるための工夫がポイントだと言う。

星加氏も強調するように、障害学など人類史的課題に取り組む研究は、短期的効果が見えにくい。しかし、分断に抗して発展する社会を実現するためには、細分化された課題への短期的成果の集積とは異なる、こうした研究が評価されるシステムが必要だ。星加氏の世界社会モデルの理論・実証研究は障害のみならず広くダイバーシティとインクルージョンを実現する上で欠かせない基盤を与えたいと言える。

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp

ワタシのオシゴト 第165回

RELAY COLUMN

教養学部等事務部教務課 坪山彰子
国際交流支援チーム 特任専門職員

時には厳しく、時には優しく。



職場にてまじめにオシゴト

2006年7月に採用以来、留学生係⇒国際交流支援係⇒国際交流支援チームと名称が変わっても「学生の不利益にならないように」をモットーに、時には優しく、時には厳しく学生と向き合っています。当チームは留学してくる学生の宿舎・奨学金・在留資格と、留学する学生の奨学金・プログラムの申請・手続きとバラエティ豊かな仕事を扱う部署です。

その中で「ワタシのオシゴト」は新規に渡日する学生の在留資格の申請と留学する学生の各種プログラム、奨学金の申請・手続きです。ここ数年は全学交換留学、サマープログラムなどの申請者も100名を超え留学熱が高まっているのを感じます。その反面、在留資格の審査が厳しくなるなどで、出入国在留管理局へ出向くことも多くなり、まさに「なんでも屋さん」の毎日です。

それでも学生が海外大学へ嬉しそうに留学するのを見送り、希望や不安でいっぱい！の様子で留学してくる学生を迎えたりするのは、「なんでも屋さん」だからこぞ味わえる一コマです。



趣味の旅行で得意ワザ発揮中！

得意ワザ：お酒が強い・胃腸が強い
自分の性格：超絶明るい・おしゃべり
次回執筆者のご指名：藤本順子さん
次回執筆者との関係：派遣留学プログラムの師匠
次回執筆者の紹介：「世界平和」が今年の願い！

デジタル万華鏡

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

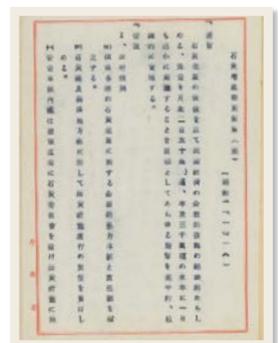
第9回 経済学研究科講師 小島浩之
経済学部資料室室長代理

経済学図書館の歴史とデジタルアーカイブ

経済学図書館は、図書館と資料室の二つの組織から成り立っています。図書館は、1900年にエンゲル係数で有名なエンゲルの旧蔵書を購入し、法科大学内に経済統計研究室を置いたことに始まります。一方の資料室は、企業資料の収集を目的に1913年に開設された商業資料文庫を淵源としています。以後、幾多の名称の変遷を経て、図書館と資料室は、1919年に日本初の経済学部が誕生してからも、一貫して社会経済の実証研究をサポートする両輪として機能してきました。

さて、蔵書のうち企業資料類については、企業体を取り巻く諸情報をも含めて蒐集するという、他機関にはない特徴があります。一般に企業資料というと、企業活動に伴って内部で蓄積・蒐集した資料のことを指します。代表的なものが意思決定過程の記録である経営資料であり、これを蒐集している大学や研究機関は他にも多くあります。一方、こちらの図書館と資料室では、国家の経済政策や産業政策に関わる資料や、労働関係の資料も同時に蒐集してきました。企業内部の経営資料に加えて、企業を統制する国家、企業を支える労働者、いわば「企業-国家-労働」の各資料を三位一体として扱ってきたのです。国家の資料は審議会等の会議資料や議事録、労働の資料とは労働組合活動の記録や、労使交渉・争議等の資料です。長年にわたり、これらの一次資料や原資料は資料室が、内外の研究書籍は図書館が体系的に保存してきました。

現在、デジタル化によりこれらの資料の保存と利活用を推進しています。2018年度からは、戦後日本の経済発展の根幹にかかわる資料（有沢広巳資料、経済安定本部資料等）をデータベースEngelを通じて公開しています。デジタルアーカイブは、少なくとも文字による内容情報を残すことができ、これを不特定多数で同時に共有できます。デジタルにより複製が拡散されることで、仮に原本が消滅したとしても、内容情報が残る確率も上がります。このように、経済学図書館では、利便性だけでなく、資料保存の一手段としてのデジタル化の可能性と必要性を念頭に置いて日々活動しています。



「石炭増産特別対策(案)」(有沢資料「傾斜生産」関係資料)3所収

www.lib.e.u-tokyo.ac.jp

インタープリターズ・第150回 バイブル

科学技術インタープリター養成部門
特任准教授

定松 淳

大学(院)で身に付く「問いを立てる力」

先日、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）の
一校で教鞭を取っておられる教員の方とお話をする
機会があった。理系大学院で博士号も取得されてい
るその先生は、主に「課題研究」のご担当をされて
いるとのことだった。受験に向けた「いかに試験で
得点を取るか」という勉強を離れて、より本来的な
“探究”を行うというその理念は素晴らしいものだ。
SSHではより力を入れて推進されているのだろう。

実際、教員の期待以上に「課題研究」に面白さ
を見出して、その探究能力を伸ばしてくれる学生も
いるという。一方で、「課題探究」に対して生徒たち
のやる気を喚起するのはなかなか大変であるともお
っしゃっていた。つまり、受験の得点に直結しない
勉強に学生たちはエネルギーを割きたがらないとい
うのだ。これは、日本の教育の潜在的機能として、
学歴という（ある種の）能力による学生のランク
付けを行っている側面が強いことを考えれば、容
易に納得のいくことである。

そしてもうひとつ教えていただいたのは、高校
生たちは「問い」を立てるのが非常に苦手、とい
うことだ。SSHの先生方の間でもそのことは認識
されており、ある学校では高校1年次に「与えら
れた言葉について問いを考える授業」を設けるこ
とすら行ったそう。そして1年の最後の方には「
ドラえもん」などと、問題のなさそうなお題に
対しても生徒たちは「問題」を考案できるよう
になってきたという。しかし、それにもかかわらず
、2年次の「課題研究」では、やはり問いを
立てるのはそれほどうまく行かなかった、との
こと。その先生は「自分が大学院でトレーニング
されていたのは、意外と簡単に身に付く能力で
はなかったと知りました」と笑っておられた。私
もインタープリタープログラムで大学院生たちと
付き合っていて感じるのは、理系の大学院生は
非常によくトレーニングされているということだ
（これは文系大学院で身に付く能力は本人の思
考過程により密着した文章作成能力であり、身
に着けるのがより難しい、ということでもある）。

しかし昨今の大学改革で求められているのは
何より「コミュニケーション能力」や「問題解決
力」であり、この種の「問いを立てる力」では
ないことは非常に残念である。ただ、このよう
な認識が得られること自体は、教育改革の成
果のひとつでもあるはずだ。大学であれ高校で
あれ、今さまざまな行われている教育改革が、
少しずつでもそのように意義ある認識の積み
重ねにつながっていくことを願わずにはおら
れない。

科学技術インタープリター養成プログラム
science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp

蔵出し! 文書館

The University
of Tokyo
Archives



第24回

収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介

100年前の鉄道マナー

以前「デジタル化された公文書綴」として『文
部省往復』をご紹介しました。今回は文部省以外
の各省庁と本学との往復文書『官庁往復』につ
いてご紹介します。

『官庁往復』は、各省庁からの様々な鑑定依
頼や施設などの借用依頼、大学からの出火届や
紛失届、海外出張に伴う旅券交付願、書籍や端
紙等の貸し借りなど、多種多様な内容の文書
が綴られており、『文部省往復』同様2013
（平成25）年に重要文化財の指定を受けまし
た。

この『官庁往復』には文書とともに添付資
料として冊子等が綴られていることがあります。
例えば報告書（鑑定結果や天体観測などの報
告書）や刊行物などです。『官庁往復 大正八
年』（資料ID：S0003/35）の中に配付依頼
の文書とともに綴られている添付資料『鐵道
から家庭へ』は、1919（大正8）年12月
に鉄道院が作成した鉄道利用案内です。この
冊子から100年前の日本の姿を垣間見ること
ができるので少し紹介したいと思います。



105ページからなる挿絵のない冊子には、
電車の乗降マナー（降りる人が先）や「老幼
婦女病客等」に席を譲ることなど、今でも呼
びかけられているものがある一方、「列車に瓦
や礫を投げぬやう」、動いている汽車から
「飛乗り飛降りをなさぬやう」、「火薬や爆
発性の危険品を御持込みにならぬやう」、な
ど時代を感じさせる見出しと実例が挙げられ
ており、これらのことが行われていたことに驚
きます。実際に、ある一人の乗客が職業用の
ダイナマイトを荷物の中に入れ網棚に置いた
ところ、ふとした拍子に床に落ち、爆発して
電車を破壊、本人はもちろん乗客数名の死傷
者を出したとあります。また、車内において
弁当の殻や果物の皮、煙草の吸殻などが手
当り次第に投げ散らかされている様や、そ
うしたゴミを車内だけでなく窓からも投げ
捨てているとあります。ひどいことに、窓か
ら投げ捨てられたものが線路見回りの作業員
に当たり、重傷を受けて気絶したことがあ
ったそうです。

ここではちょっと紹介できない内容も書か
れている『鐵道から家庭へ』。こうして当館
では所蔵対象としなような刊行物に出会う
のも資料整理の面白さです。

（事務員・村上こすえ）

東京大学文書館 www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features,Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
1月8日	生産技術研究所	生研プロフィール：エディ (IIS Profiles:Eddy) を発行しました
1月10日	生産技術研究所	ボルドー大学との協定締結およびワークショップを開催
1月14日	本部入試課	令和2年度大学入試センター試験東京大学本郷試験場案内について
1月14日	総合文化研究科・教養学部	東京大学×国立音楽大学 オークストラを用いたヒューマンアンドロイドによる演奏表現の共同研究が始動
1月14日～ 2月4日	本部広報課	多様性に富む藻類の総合商社を目指す柏発ベンチャー／竹下毅さん、パネル単位の即時監視技術で太陽光発電をサステナブルに／李旻さん、衛星用のアンテナをシェアして宇宙と常時接続する未来へ／倉原直美さん、東京大学におけるベンチャー支援の取組み 「淡青」39号 UTokyo 30s より
1月16日	本部国際戦略課	第11回日中長学長会議が早稲田大学で開催されました
1月16日	本部国際戦略課	日印交流プラットフォーム構築プログラム(JIEPP) 第2回シンポジウムの開催について
1月17日	医学部附属病院	【医療リアルワールドデータ活用人材育成事業】2020年度履修生公募
1月20日	本部広報課	令和元年度退職教員の最終講義1月開催分のお知らせ
1月21日	環境安全本部	令和元年度 総長安全衛生パトロール実施される
1月22日	史料編纂所	国際研究集会「維新史料研究と国際発信」を開催
1月22日	広報戦略本部	東大3MT初代優勝者に聞く 国際研究コミュニケーション大会参加の意義と成功の秘訣は？
1月23日	薬学系研究科・薬学部	抗がん活性ペプチド系天然物ヤクアミドBの効率的固相全合成に成功
1月28日	本部入試課	令和2年度第2次学力試験出願状況速報
1月28日	広報戦略本部、工学系研究科・工学部	研究科紹介ビデオを公開 工学系研究科研究科長 大久保達也
1月28日	定量生命科学研究所	全身をめぐる血管系の臓器特異性を全ゲノムレベルで解析
1月29日	本部社会連携推進課	SHIBUYA QWS～宇宙線研究所長 梶田隆章 講演「ニュートリノ振動の発見」開催
1月30日	生産技術研究所	シンガポール国立大学と研究協力に関する覚書を締結
1月30日	生産技術研究所	榊裕之 名誉教授が日本学士院会員に選定
2月4日	本部学生支援課	陸上運動部阿部選手が箱根駅伝に関東学生連合主将として出場
2月7日	史料編纂所	国際研究集会「日記史料の可能性―日・韓の事例から―」を開催
2月7日	本部入試課	令和2年度前期日程試験第1段階選抜合格者発表のお知らせ (予告)

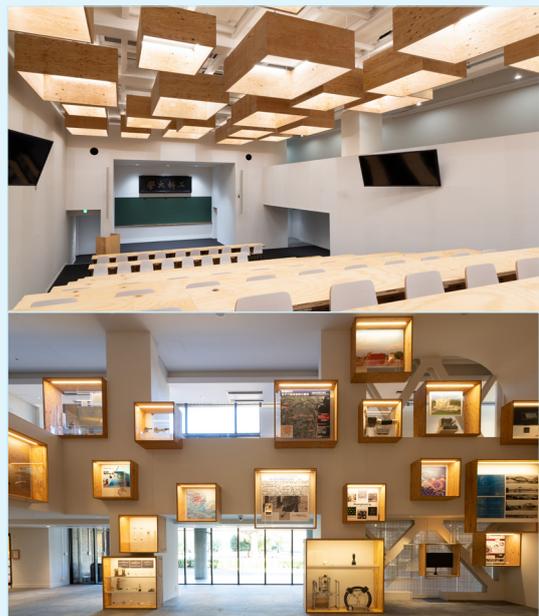
～キャンパスニュース～

工学部11号館にHASEKO-KUMAホールが誕生

長谷工コーポレーションの寄附と隈研吾教授のデザインにより、工学部11号館の講堂とTloungeが新たな発信・交流拠点「HASEKO-KUMA HALL」としてリニューアルオープンしました。1月30日には当地で記者会見とレセプションが行われ、長谷工コーポレーションの大栗会長、成澤文京区長、五神総長、大久保研究科長、隈研吾教授、メディア関係者など100名以上が参列しました。

講堂とラウンジの両方に木製のBOXが全76個配されているのが大きな特徴。「nest of wisdom」と名付けられたこの箱は、講堂では照明と音響の効果を高め、ラウンジでは

工学系研究科・工学部の研究成果を展示するショーケースとして機能します。現在は、100年以上前に製造された黎明期の真空管から、18桁精度(300億年で1秒しかずれない精度)が達成可能な「光格子時計」まで、今日の社会を実現した科学技術の進歩と重なる、各専攻の時空を超えた貴重品の数々が公開されています(展示物は今後順次入れ替わる予定)。2階には赤い椀が目印のレストラン「U-gohan」が開店。基本メニューは北海道当別町生まれの食材を使う米と汁。昼は弁当&イートイン、夜は定食&コース料理をお酒とともに楽しめます。ご体験あれ!





CLOSE UP

令和元年度総長安全衛生パトロール実施される

(環境安全本部)



農学部2号館の様子

1月8日、農学生命科学研究科及び地震研究所を対象として、令和元年度総長安全衛生パトロールが実施されました。このパトロールは、総長自らが安全衛生に対する姿勢を示すことにより全学の安全衛生意識を向上させることを目的として、平成18年度より毎年度実施されています。

五神総長、松木理事・副学長、宮園理事・

副学長、光石環境安全本部長ほか環境安全本部員及び施設部の関係者により、両部局の実験室をはじめ、動物医療センター、地下免震装置等について、環境安全衛生上の管理状況、施設の老朽化の状況、地震対策等が確認されました。

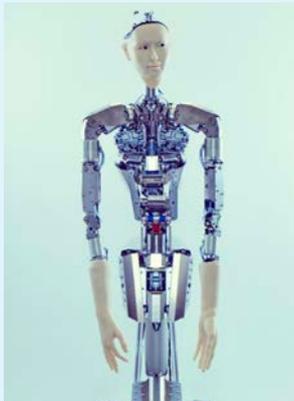
講評会では、五神総長から「高いレベルの研究を継続するために、安全衛生環境の維持が必要である」などとコメントをいただきました。



CLOSE UP

アンドロイドの演奏表現の共同研究を国立音大と始動

(総合文化研究科)



オルタ3(Powered by mixi, Inc.)

国立音楽大学と東京大学は、アンドロイド「オルタ3」の演奏表現に関して、オーケストラを用いた共同研究を開始することの記者会見を、1月11日に国立音楽大学で行いました。

総合文化研究科の池上高志教授が大阪大学の石黒浩教授のアンドロイドに自発運動プログラムを組み込み、渋谷慶一郎氏が作曲して仕上げたオペラ『Scary Beauty』は、2018年に日本科学未来館で上演。2019年には新国立劇場での演奏で話題を呼びました。国立音楽大学の板倉康明客員教授は、そのリハーサルにおいて音楽的監修を担いました。オーケストラは指揮者のさまざまな動きや指示に対しての解釈が個人

によって異なる演奏者の集合である合奏体ですが、「オルタ3」の動きをより洗練させるには実際にオーケストラを使用して「オルタ3」と合奏体の関わり方を継続して研究・実験する必要があります。同時に、国立音楽大学の今井慎太郎准教授の協力も仰ぎ、「オルタ3」の音声認識プログラムの構築を開始。今後、池上研究室の動きのプログラムと関連させるための研究を行います。

実際にオーケストラを用いての同種の実験はプログラミングを担う東大、演奏をする国立音大の両者が揃って初めて実現します。実験結果を基に未来のアートを占うこととなります。



CLOSE UP

国際研究集会「維新史料研究と国際発信」を開催

(史料編纂所)



報告する箱石先生(右端)。スクリーン右は司会・報告者の小野先生

12月10日、史料編纂所・同所維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクトの共催(協力: JSPS人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業)により、国際研究集会「維新史料研究と国際発信」を開催しました。日本史を研究する海外の研究者を招聘し、本プロジェクトに何が望まれるか、海外研究者の視点から意見を得るとともに、本プロジェクトや本所所蔵幕末維新史料・本所幕末維新史データベースについての国際発信を行うものです。集会では、史料編纂所の箱石大准教授・横山伊徳

教授・杉本史子教授・小野将准教授の4名が、順に「史料編纂所の歴史情報研究と維新史料室DBの位置」、「19世紀大老文書の史料集刊行と電子索引公開」、「維新史料網要データベースの英訳化と翻訳グロッサリー研究について」の題で報告。ルーク・ロバーツ教授(カリフォルニア大学サンタバーバラ校)、ロバート・ヘリヤー准教授(ウェイク・フォレスト大学)からは、ご自身の日本史研究における御苦労を踏まえ、研究者だけでなく日本史を学ぶ学生への効果という点でも、英訳化の意義が力説されました。



CLOSE UP

ボルドー大学と協定を締結しワークショップを開催

(生産技術研究所)



参加者全員での記念撮影(中央: ボルドー大学テュノン・ドゥ・ララ学長、中央右: 岸利治所長)

12月11日~12日、第2回生研・ボルドー大学合同シンポジウムが、ボルドー大学タランスキャンパス、オーキャレにて開催され、協定の締結およびワークショップが行われました。本シンポジウムは、ボルドー大学との共同研究活動を促進することを目的として、2018年12月から始まりました。両大学にまたがるマイクロ・ナノテクノロジー、神経科学、ケミカルサイエンス、マテリアルサイエンスの融合研究の創発がテーマであり、機械工学、物質科学、物理、生物化学、生体工学、神経科学など多彩な

分野の研究者が参加しました。

1日目は、ボルドー大学のテュノン・ドゥ・ララ学長と岸利治所長が国際交流協定書へサイン。ワークショップで約50名の参加者が活発な議論を行った後は、「ワイン学校」でワイン試飲。場所をサンタンドレ大聖堂近くのレストランに移し、盛大な懇親会が催されました。2日目には、各研究者が選択したキャンパスへおもむき、研究室訪問を行いました。一体感の形成と相互理解が進み、今後の共同研究の大幅な強化が期待できる2日間となりました。



信号と雑音

自然界には、自然現象が発する様々な「信号」とそれを覆い隠そうとするさらに多様な「雑音」が存在します。「信号」と「雑音」の定義は、我々が知りたい現象由来なのかどうかという相対的なものですが、通常は、知りたい現象以外からの「雑音」を可能な限り除去し、「信号」をクリアにしてその素性を明らかにします。地震学分野では、震源位置や地下の境界面を知るため、震源から放射される縦波や横波、さらに地震波が伝搬する途中で二次的に生じる変換波や反射波などが信号として、風や波浪などの自然現象、電車や車、工場など人間が生成する振動が雑音として取り扱われます。私が発見した深部低周波微動という現象はスロー地震の一つとして現在では世界中の多くの研究者が注目していますが、波形記録そのものは人間社会から生成される「雑音」によく似ており、従来の地震学では「信号」とは認識されませんでした。しかし、稠密な観測網が構築されたことで同相現象の認識力が向上し、「信号」として認識されるようになったのです。また、雑音も微弱な信

号の重ね合わせであるという考え方に基づき、あるルールに従って雑音を足し合わせることで地下の情報を与える信号とみなせる、という理論・解析手法が開発され、「雑音」も重要な「信号」源として大いに活用されるようになってきました。このように、今後さらに観測インフラや解析手法が高度化することによって、「雑音」から「信号」にその価値が変質し、さらに科学的成果が創出されるものと期待されます。

人間社会に置き換えれば、「信号」は何か物事を進めるうえでの建設的な賛成意見であり、「雑音」はそれに反する、あるいは多種多様な意見と考えることができます。ただし、自然界と同様に「信号」と「雑音」は相対的なものであり、使い方によっては、「雑音」も重要な「信号」としての真価を発揮するのかもしれない。

小原一成
(地震研究所)

